

# 恋愛様相モデルによる異性友人関係・恋愛関係・夫婦関係の比較

高坂康雅 *KOSAKA Yasumasa*

- 1 — 問題と目的
- 2 — 方法
- 3 — 結果
- 4 — 考察

【要旨】本研究の目的は、恋愛様相モデル（高坂, 2011）の観点から異性友人関係、恋愛関係、夫婦関係の比較を行うことであった。結婚している者 119 名、未婚で恋人がいる者 104 名、未婚で恋人がおらず異性友人がいる者 96 名を対象として、恋愛様相尺度（高坂・小塩, 2015）、関係満足度尺度、親密度項目について尋ねた。恋愛様相尺度 3 下位尺度について比較したところ、「絶対性」得点や「開放性」得点において恋愛関係と夫婦関係の間で有意な差がみられたが、恋愛関係と異性友人関係の間には有意な差はみられなかった。また、恋愛様相尺度 3 下位尺度と関係満足度、親密度との関連を検討したところ、恋愛関係と夫婦関係ではそれらの関連が類似していたが、これらと異性友人関係では関連の強さに有意な差がみられた。これらから、異性友人関係と恋愛関係は関係満足度や親密度との関連において質的に異なる関係であり、恋愛関係と夫婦関係は恋愛様相モデルの次元において量的に異なる関係であることが示された。

## 1 — 問題と目的

多くの青年は、青年期に入ると異性や恋愛に関心をもち、実際に恋愛関係を構築するものも少なくない。構築された恋愛関係が維持・継続され、結婚し、夫婦関係へと変わっていくこともあれば、関係が悪化し、崩壊する（失恋に終わる）こともある。このような恋愛関係を、恋と愛との関係を通して捉えようとしたものに、恋愛様相モデル（高坂, 2011）がある。

返田（1998）は“日本語の恋愛という言葉は恋と愛という矛盾、対立する要因が統合されたものであることを示している”と指摘している。このように恋と愛を相反する特徴を有する状態としてとらえ、恋愛は恋の状態と愛の状態が分かちがたく渾然とした状態であるとする考え方を“恋と愛の二元的・一元性（統一性）論”（西平, 1981）と呼ぶ。恋愛様相モデルは、この“恋と愛の二元的・一元性（統一性）論”に基づいて作成されたモデルであり、このモデルでは恋と愛は対比的な相反する状態であるとし、恋と愛は対極におかれている

(Figure 1)。

また、高坂 (2011) は、恋には「相対性」、「所有性」、「埋没性」という特徴があり、愛には「絶対性」、「開放性」、「飛躍性」という特徴があるとし (それぞれの特徴については、Table 1 にまとめた)、恋は「相対性」、「所有性」、「埋没性」の3点による三角形で、愛は「絶対性」、「開放性」、「飛躍性」の3点による三角形で表されている。また、「相対性」と「絶対性」、「所有性」と「開放性」、「埋没性」と「飛躍性」はそれぞれを対局とした次元を構成し、全体として三角柱の形状となっている。

高坂・小塩 (2015) は、恋愛様相モデルに基づいて、恋愛関係のあり方 (様相) を把握するための尺度である恋愛様相尺度を作成している。この尺度は、「相対性—絶対性」、「所有性—開放性」、「埋没性—飛躍性」という3下位尺度で構成されており、「相対性—絶対性」が恋愛関係満足度や結婚願望と関連することや、いずれの下位尺度も年齢や交際期間とは関連しないことなどを明らかにしている。また、Kosaka (2016) は「所有性—開放性」が社会的DVや心理的DVと関連することを示している。

このように、恋愛様相モデル及び恋愛様相尺度は恋と愛という対極的な状態から恋愛関

Figure 1 青年期における恋愛様相モデル (高坂, 2011)

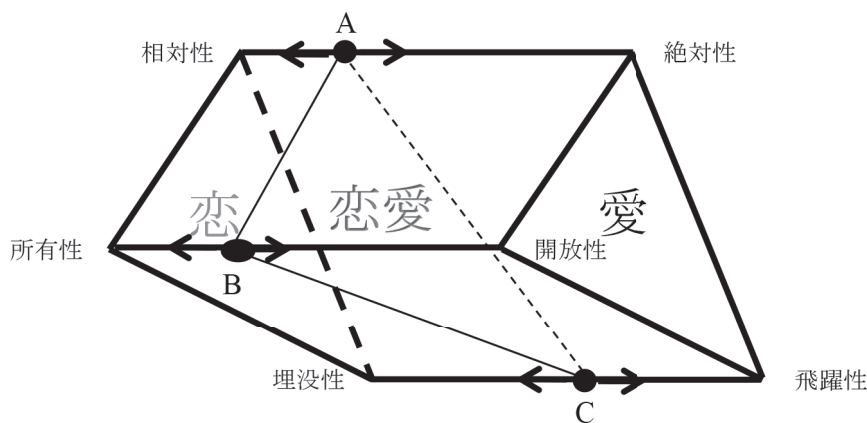


Table 1 恋愛様相モデルの各特徴の概要 (高坂, 2011より作成)

恋の特徴	愛の特徴
相対性 相手を他の異性と比較したり、自身の条件に合致しているかで評価すること	絶対性 他者との比較を超えて、相手の欠点や短所も含めて、相手の存在そのものを受容すること
所有性 相手を物理的・時間的・心理的に占有し、相手の精神的なエネルギーを自分に向けたままにさせようとする	開放性 相手の幸せや成長のために、自身の時間、労力、精神的なエネルギーを与えること
埋没性 生活や意識の中心が相手や相手との関係になり、相手や相手との関係以外の事柄に対する関心や意欲が低下する	飛躍性 相手や相手との関係を基盤として、それら以外のものにより一層興味や関心を持ち、挑戦・努力すること

係のあり方を把握しようとするものである。一方、恋愛様相モデルや恋愛様相尺度は恋愛関係に特化したものとして作成されているため、これらのモデルや尺度によって、恋愛関係と他の関係とを弁別することが可能であるかどうかは明らかにされていない。そこで、本研究では、「男女の友情」や「恋人と友人の境界」が話題になる(西浦, 2013) 異性友人関係と、恋愛結婚が主流となり、恋愛関係から移行する関係性とされている(茂木・石田, 2019) 夫婦関係を取り上げ、恋愛関係と夫婦関係、異性友人関係との差異を明らかにすることを目的とする。

恋愛関係と異性友人関係の差異については、これまで若干の研究が蓄積されている。Rubin (1970) は異性友人関係と恋愛関係は質的に異なる関係であると指摘している。また、Berscheid, Snyder, & Omoto (1989) では、恋愛関係と異性友人関係では会う回数や一緒に過ごす時間に差異がみられるとしている。Werking (1997) は異性友人関係の構成要素について、恋愛関係に比べ身体的魅力よりも精神的魅力を多く含んでおり、その関係はより対等であること、また恋愛関係のように排他性を必要としないことなどを指摘している。金政・大坊 (2003) は Sternberg (1997) の改訂版 Triangular Love Scale の日本語版を作成し、恋人、ボーイフレンド/ガールフレンド、片思い、異性の友人との間の比較を行っている。その結果、恋人は異性友人よりも「親密性」「情熱」「コミットメント」のすべてにおいて得点が高いことが明らかにされている。高坂 (2010) は恋人、異性友人、同性友人に対する期待について比較を行い、男性では恋人と異性友人に対して「外見的魅力」を期待するが、同性友人には期待しないことや、女性では恋人に対しては同性友人や異性友人以上に「外見的魅力」や「他者配慮」を期待していることなどを明らかにしている。谷口・大坊 (2005) では、恋人と異性友人に対する自己呈示の比較を行い、男性では恋人に対しても異性友人に対しても、自分を「外見的魅力」をもったものとして自己呈示していたのに対して、女性では「外見的魅力」「有能さ」「社会的望ましさ」「個人的親しみやすさ」のいずれにおいても、異性友人よりも恋人に対してより示そうとしていることを明らかにしている。立脇 (2007) では、異性交際中の感情について、恋人、片思い、異性友人の間で比較を行い、それらの感情が関係満足度や関係継続意志に及ぼす影響について検討している。その結果、「情熱感情」「親和不満感情」「尊敬・信頼感情」「攻撃・拒否感情」のいずれも恋人の方が異性友人よりも高いことを示している。また、恋人も異性友人も「尊敬・信頼感情」が関係満足度に正のパスを示していたが、関係継続意志に対しては恋人では「情熱感情」が、異性友人では「尊敬・信頼感情」が影響を及ぼしていることを明らかにしている。

これらの知見から、異性友人関係と恋愛関係の差異は、得点の高低のような量的な差異とともに、Rubin (1970) や立脇 (2007) で指摘されているように、関係満足度などとの関連の示し方の違いにみられるような質的な差異であると考えられる。また、高坂 (2010) や谷口・大坊 (2005) をもとに、西浦 (2013) が“女性は異性友人と恋人を区別する傾向が強く、男性は区別しない傾向が強い”と指摘していることから、異性友人関係と恋愛関係の間でみられる差異は、女性に比べ男性の方が小さいと推測される。

一方、恋愛関係と夫婦関係の差異を指摘した研究は必ずしも多くはない。Shaver & Hazan (1988) はアダルト・アタッチメント理論の立場から、愛着は青年期や成人期においても、主に恋愛関係や夫婦関係のような二者関係の絆の形成や継続に寄与し、その関係性に影響を与えるものであると指摘し、恋愛関係と夫婦関係の差異には言及していない。また、金政 (2010) は中年期夫婦における関係不安・親密性回避がネガティブな感情を介して関係評価に及ぼす影響を検討した結果、母子関係や青年期の恋愛関係と類似した結果が得られたとしている。恋愛関係から夫婦関係への移行にはコミットメントが関わっているとの指摘もあるが、この移行期についてコミットメントに着目した研究は多くなく、十分に明らかにされていない (宇都宮, 2016)。

これらを見ると、恋愛関係と夫婦関係はそれが私的な関係か公的な関係かは異なるが、心理的に両者の違いを見出すことは困難ではないかと推測される。

以上から、本研究では、恋愛様相モデルの観点から異性友人関係、恋愛関係、夫婦関係の比較を行うことを目的とする。その際、異性友人関係と恋愛関係の差異には性差が関わっていることが推測されるため、性の要因も考慮して検討することとする。なお、本研究における恋人とは、高坂 (2016) に基づいて、“直接接触・交流できる異性であり、恋愛関係を構築・維持することに本人とともに同意している者”とした。また、夫婦関係については法律婚とし、事実婚は含めなかった。

## 2——方法

### 調査対象者・分析対象者

- (1) 夫婦関係 20歳から34歳で結婚しており、子どもがいない者200名(男性100名、女性100名)を調査対象者とした。このうち、すべての項目に対して同一の回答をしていた者や、ダミー項目に対して適切に回答していない者を除き、119名(男性44名、女性75名;平均年齢29.5歳、標準偏差3.2歳)を分析対象者とした。
- (2) 恋愛関係 20歳から34歳で結婚経験がなく、現在恋人がいる者200名を調査対象者とした。(1) 夫婦関係と同様の基準により、104名(男性35名、女性69名;平均年齢26.8歳、標準偏差3.8歳)を分析対象者とした。
- (3) 異性友人関係 20歳から34歳で結婚経験がなく、現在恋人がおらず、異性の友人がいる者200名を調査対象者とした。(1) 夫婦関係と同様の基準により、96名(男性32名、女性64名;平均年齢25.9歳、標準偏差4.5歳)を分析対象者とした。

### 調査内容

- (1) 恋愛様相尺度 高坂・小塩 (2015) の恋愛様相尺度を使用した。この尺度は、恋愛様相モデル (高坂, 2011) に基づいて作成されており、「相対性—絶対性」、「所有性—開放性」、「埋没性—飛躍性」の3下位尺度14項目で構成されている (以下、「絶対性」、「開放性」、「飛躍性」)

と表記する)。両側に文章が示され、どちらの文章によりあてはまるかを6件法で回答する形式となっている。高坂・小塩 (2015) において信頼性、妥当性が確認されている。なお、本来は恋愛関係について測定する尺度であるため、項目内では「恋人は…」などと表記されているが、夫婦関係について回答する対象者については「配偶者は…」とし、異性友人関係について回答する対象者については異性の友人をAさんとして、「Aさんは…」と、項目の表記を一部変更した。また、異性友人については複数いる可能性があるため、特定のひとりを思い浮かべて回答するよう求め、以下の質問についても同様とした。

(2) 関係満足度尺度 高坂・小塩 (2015) で使用されている恋愛関係満足度尺度8項目を使用し、5件法で回答を求めた。関係満足度尺度についても、(1) 恋愛様相尺度同様、項目内の表記を一部変更した。

(3) 親密度項目 相手 (配偶者、恋人、異性友人) との親密度を測定するため、「○○とは仲が良い」、「○○との間には心理的な距離を感じる」(逆転項目)、「○○とは気心が知れた仲である」、「○○とは親密な関係を築けている」という4項目を独自に作成し、5件法で回答を求めた。なお、項目内の「○○」には、配偶者、恋人、異性友人を当てはめて回答するよう求めた。

#### 調査時期・調査方法

調査は2020年9月に、アイブリッジ株式会社のインターネットリサーチ事業「Freeasy」に登録しているモニターを対象に、インターネット上で行った。

#### 倫理的配慮

著者が「Freeasy」より得られる調査対象者個人に関する情報は、年齢、在住都道府県、性別、婚姻状況 (既婚/未婚)、職業・業種、世帯年収、居住形態 (持ち家、賃貸、社宅など)、子どもの有無であり、氏名など個人を特定し得る情報は取得できない。調査対象者個人を特定し得る情報が提供されないことや上記の個人に関する情報が提供されることに同意し、「Freeasy」のモニターとして登録しており、本研究でもこの同意が適用されている。調査実施の際にはスクリーニング調査及び本調査のいずれにおいても、学術研究のためのアンケートであり、得られたデータはスクリーニングあるいは学術研究のために用いられること、個人が特定されない形で統計的に処理されたデータとして利用されることをアンケート導入前のトップページで示した。得られたデータは著者以外が無断で閲覧、利用することのないよう管理された。調査に回答するかどうかは対象者自身の自由意思であり、回答をしなかったり、途中でやめたりしたことによる不利益は一切生じないことも事前に同意されており、本研究でも適用された。回答した者にはアイブリッジ株式会社より規定に基づいたポイントが付与された。なお、著者の所属機関には倫理審査委員会はないため、倫理審査等は受けていない。調査内容については、人権侵害やプライバシーの侵害など倫理的な問題が生じないよう十分吟味・検討したうえで、調査を実施した。

Table 2 恋愛様相尺度の確証的因子分析結果

因子	恋	項目	愛	標準化パス係数		
				夫婦関係	恋愛関係	異性友人関係
相対性—絶対性		Aさんと他の異性を比較すると、他の異性の方が良く見え、がっかりすることがある	Aさんの良いところは、他の異性と比較するまでもなく、十分にわかっている	.70	.79	.72
		Aさんを見てると、自分の理想に合わないところをつい探してしまう	私の理想とは関係なく、Aさんはそのまま魅力的である	.72***	.77***	.74***
		Aさんの欠点をみつけると、私の理想から遠のいた気がして落ち込む	Aさんの欠点をみつけても、Aさんの新たな一面を発見したようで嬉しくなる	.71***	.65***	.65***
		Aさんの長所や良い面には満足しているが、短所や欠点は見ないようにしている	短所や欠点も含めて、Aさんに十分満足している	.72***	.74***	.83***
		Aさんよりも、もっと自分にふさわしい異性がいるのではないかと思ひ、つい他の異性と比較してしまう	Aさん以上に自分にふさわしい異性はどんなに探してもおらず、Aさんの代わりになる異性はいないと思う	.80***	.78***	.64***
所有性—開放性		Aさんには、何をしているときでも、私のことを気にかけてくれるよう求めている	Aさんが、私に気兼ねなく、やるべきことに専念できるように支えている	.20	.54	.49
		Aさんが仕事や勉強などに熱心になっていると、私は放っておかれているようで不安になる	Aさんが仕事や勉強に熱心になっているとき、私が放っておかれても、素直に応援できる	.59†	.53***	.55***
		Aさんが忙しいと、一緒にいられないので、悲しくなる	Aさんが忙しくても、Aさんが活動に集中できるように、さまざまな面でサポートしている	.64†	.50***	.58***
		私ともっと多くの時間を一緒に過ごすために、Aさんには他の活動に時間や労力は費やさないでほしい	Aさんが他の活動に熱心に取り組むために、自分の時間や労力は惜しまず協力している	.57†	.74***	.67***
		私との時間を大切にしてもらうために、Aさんにはさまざまな行動や人とのつきあいを今よりも減らしてほしい	Aさんがさまざまな行動や人とのつきあいを今よりもできるように、積極的に協力している	.69†	.75***	.81***
埋没性—飛躍性		Aさんと過ごす時間を減らしたくないので、新しいことには取り組まないようにしている	Aさんとの関係を拠り所として、新しいことにも積極的に取り組もうとしている	.24	.39	.54
		Aさんのことばかり考えてしまい、仕事や勉強がおろそかになる	Aさんがいるからこそ、仕事や勉強に集中して取り組むことができる	.58*	.65**	.58***
		Aさんとつきあっていると、仕事や勉強、他の人とのつきあいで苦勞しても、Aさんのことを思い出すと、頑張ろうという気になる	仕事や勉強、他の人とのつきあいで苦勞しても、Aさんのことを思い出すと、頑張ろうという気になる	.45*	.56**	.61***
		生活の中心はAさんであり、Aさんの要望や都合にあわせた生活を送っている	Aさんからの支えを得て、日々の生活を意欲的に過ごすことができる	.49*	.70**	.66***
相関係数 (共分散)		絶対性—開放性		.55†	.42**	.40*
		絶対性—飛躍性		.73*	.69**	.59**
		開放性—飛躍性		.69	.61*	.89**

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$ 

注. 標準化パス係数で有意水準の表記がない項目は、係数を1に固定した項目であるため、有意水準は算出されない。

### 3 — 結果

#### 各点数の作成

(1) 恋愛様相尺度 恋愛様相尺度 15 項目について、得点が高いほど「愛」の特徴を示すように得点の処理を行った後、高坂・小塩 (2015) をもとに因子分析モデルを作成し、夫婦関係、恋愛関係、異性友人関係の 3 群による多母集団同時分析を行った。その結果、モデル適合度は GFI=.860、AGFI=.799、CFI=.880、RMSEA=.049 と許容範囲内であった (Table 2)。各因子から項目へのパスを見ると、恋愛関係と異性友人関係ではすべてのパスが有意であったが、夫婦関係では「開放性」から各項目へのパスがすべて有意傾向であった。本研究では、同一の得点によって、3 つの関係性を比較することが目的であり、また恋愛様相尺度が夫婦関係を想定して作成されていないことなどを考慮し、このモデルを採択することとした。

「絶対性」5 項目、「開放性」5 項目、「飛躍性」4 項目の  $\alpha$  係数を算出したところ、夫婦関係では「絶対性」が .85、「開放性」が .65、「飛躍性」が .52 であった。恋愛関係では「絶対性」が .86、「開放性」が .75、「飛躍性」が .64 であった。異性友人関係では「絶対性」が .84、「開放性」が .75、「飛躍性」が .68 であった。夫婦関係の「飛躍性」の  $\alpha$  係数は他に比べても低い値であったが、項目の除去などを行っても  $\alpha$  係数の向上はみられなかったため、4 項目のまま進めることとした。

各群について「絶対性」5 項目、「開放性」5 項目、「飛躍性」4 項目の平均を算出し、各得点とした。

(2) 関係満足度 関係満足度 8 項目について、逆転項目の逆転処理を行った後、夫婦関係、恋愛関係、異性友人関係ごとに主成分分析を行った (Table 3)。その結果、いずれにおいても、すべての項目が第 1 主成分に .40 以上の負荷量を示した。また  $\alpha$  係数を算出したところ、夫婦関係では .94、恋愛関係では .91、異性友人関係では .86 と、いずれも十分な

Table 3 関係満足度尺度の主成分分析結果

項目	主成分負荷量		
	夫婦関係	恋愛関係	異性友人関係
Aさんとの関係は、自分にはあわないと思う※	.89	.84	.61
Aさんとのつきあい方がうまくいっていると感じる	.90	.89	.82
Aさんとの関係は、私が望んでいたものとは違っている※	.76	.73	.62
Aさんとの関係に満足している	.89	.85	.82
Aさんといるときの自分は、本当の自分ではない気がする※	.82	.71	.71
Aさんといるときには、自分らしい自分でいられる	.80	.83	.64
Aさんとのつきあいは本当はつらいときがある※	.81	.78	.79
Aさんとの関係は今のままでいいと思う	.85	.75	.70
寄与率	70.6%	64.0%	51.7%

注: 項目末尾の※は逆転項目であることを意味する。また、逆転項目については、逆転処理をしたのち、分析を行った。

値を示した。

そこで、8項目の平均を算出し、関係満足度得点とした。

(3) 親密度 親密度4項目について、逆転項目の逆転処理を行った後、夫婦関係、恋愛関係、異性友人関係ごとに主成分分析を行った (Table 4)。その結果、いずれにおいても、すべての項目が第1主成分に .40以上の負荷量を示した。また $\alpha$ 係数を算出したところ、夫婦関係では .84、恋愛関係では .86、異性友人関係では .82と、いずれも十分な値を示した。

そこで、4項目の平均を算出し、親密度得点とした。

### 3つの関係における恋愛様相3得点の比較

夫婦関係、恋愛関係、異性友人関係という3つの関係性によって恋愛様相尺度3得点を比較するため、関係性(3)×性(2)の2要因分散分析を行った (Table 5)。その結果、「絶対性」得点では関係性の主効果が有意であり ( $F(2,313) = 5.05, p < .01$ )、多重比較の結果、夫婦関係が恋愛関係や異性友人関係よりも得点が高かった。また「開放性」得点でも関係性の主効果が有意であり ( $F(2,313) = 4.29, p < .05$ )、多重比較の結果、夫婦関係が恋愛関係よりも得点が高かった。「飛躍性」得点では、関係性の主効果、性の主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった。

Table 4 親密度項目の主成分分析結果

項目	主成分負荷量		
	夫婦関係	恋愛関係	異性友人関係
Aさんとは親密な関係をきずけている	.85	.91	.84
Aさんとは仲が良い	.86	.87	.86
Aさんとの間には心理的な距離を感じる※	.79	.77	.71
Aさんとは気心の知れた仲である	.83	.86	.82
寄与率	69.2%	73.2%	65.5%

注. 項目末尾の※は逆転項目であることを意味する。また、逆転項目については、逆転処理をしたのち、分析を行った。

Table 5 恋愛様相尺度3下位尺度得点の2要因分散分析結果

	異性友人関係	恋愛関係	夫婦関係	関係性 (2,313)	性 (1,313)	交互作用 (2,313)
「相対性—絶対性」得点						
男性	4.28 (0.84)	4.21 (1.19)	4.75 (0.89)	5.05**	1.05	0.61
女性	4.14 (0.99)	4.26 (1.09)	4.47 (0.99)			
「所有性—開放性」得点						
男性	4.13 (0.79)	3.93 (1.00)	4.36 (0.72)	4.29*	0.49	0.90
女性	4.29 (0.69)	4.06 (0.78)	4.26 (0.75)			
「埋没性—飛躍性」得点						
男性	4.18 (0.72)	4.06 (0.80)	4.34 (0.77)	0.44	2.01	1.45
女性	4.38 (0.75)	4.33 (0.81)	4.26 (0.78)			

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$



### 恋愛様相3得点と関係満足度・親密度との関連

恋愛様相尺度3得点と関係満足度、親密度との関連を検討するため、恋愛様相尺度3得点から関係満足度、親密度にパスを設定したモデルを作成し、関係性(3)×性(2)の6群による多母集団同時分析を行った。いずれの群においても有意にならなかったパスを削除し、繰り返し分析を行い、すべてのパスがいずれかの群において有意になったモデルを採用した。適合度はGFI=.984、AGFI=.880、CFI=.999、RMSEA=.017であった。

男性(Table 6)では、恋愛関係と夫婦関係において「絶対性」得点から関係満足度、親密度へのパスが有意であり、異性友人関係における「絶対性」得点から関係満足度、親密度へのパスとの間に有意な差があることが確認された。また、異性友人関係では「飛躍性」得点から親密度へのパスが有意であったが、恋愛関係や夫婦関係における「飛躍性」得点から親密度へのパスとの間に有意な差はみられなかった。

女性(Table 7)でも、恋愛関係と夫婦関係において「絶対性」得点から関係満足度、親密度へのパスが有意であり、異性友人関係における「絶対性」得点から関係満足度、親密度へのパスとの間に有意な差があることが確認された。また、異性友人関係では「開放性」得点から関係満足度へのパスと「飛躍性」得点から親密度へのパスが有意であったが、これらと恋愛関係や夫婦関係におけるパスとの間に有意な差はみられなかった。

## 4——考察

本研究の目的は、恋愛様相モデルの観点から、異性友人関係、恋愛関係、夫婦関係の比較を行うことであった。

まず、異性友人関係と恋愛関係の間では、恋愛様相尺度3下位尺度得点において有意

Table 6 各関係における恋愛様相尺度3下位尺度と関係満足度、親密度との関連(男性)

	異性友人関係		恋愛関係		夫婦関係	
	満足度	親密度	満足度	親密度	満足度	親密度
「相対性—絶対性」得点	.30†	.14	.71***	.58***	.60***	.60***
「所有性—開放性」得点	.17	—	-.11	—	.05	—
「埋没性—飛躍性」得点	—	.34*	—	.07	—	.07

\*\*\*  $p < .001$ . \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

Table 7 各関係における恋愛様相尺度3下位尺度と関係満足度、親密度との関連(女性)

	異性友人関係		恋愛関係		夫婦関係	
	満足度	親密度	満足度	親密度	満足度	親密度
「相対性—絶対性」得点	.29*	.32*	.70***	.71***	.71***	.67***
「所有性—開放性」得点	.28*	—	.02	—	.05	—
「埋没性—飛躍性」得点	—	.23*	—	-.02	—	.05

\*\*\*  $p < .001$ . \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

な差はみられなかった。金政・大坊（2003）が改訂版 Triangular Love Scale 日本語版を用いて恋人と異性友人との比較を行った際には、「親密性」「情熱」「コミットメント」のいずれも恋人の方が有意に高いことが示されている。これらの結果の差異は、Sternberg の愛情の三角理論の3要素が愛情の感情的な側面を捉えているのに対し、恋愛様相モデルが愛の認知的・行動的な側面を捉えていることによるものと考えられる。Werking（1997）は異性友人関係が恋愛関係に比べ身体的魅力よりも精神的魅力を多く含んでいると指摘しているが、恋愛様相モデルの3次元には身体的魅力に関する内容が含まれていないことも、異性友人関係と恋愛関係との間で有意な差がみられなかった要因であると考えられる。

一方、関係満足度や親密度との関連では、異性友人関係において男性では「絶対性」得点と関係満足度、親密度との間に有意な関連はみられなかったが、恋愛関係においては「絶対性」得点と関係満足度、親密度との間に有意な関連がみられた。また女性においては異性友人関係でも「絶対性」得点と関係満足度、親密度との間に有意な関連はみられたが、その関連の強さは恋愛関係における関連よりも弱かった。Rubin（1970）は異性友人関係と恋愛関係とは質的に異なると指摘し、立脇（2007）では異性交際中の感情が関係満足度や関係継続意志に及ぼす影響が、異性友人関係と恋愛関係では異なることを明らかにしている。本研究でみられた「絶対性」得点と関係満足度、親密度との関連における異性友人関係と恋愛関係との差異は、これらの指摘や知見と合致するものであり、本研究においても、異性友人関係と恋愛関係は量的な差異よりも質的な差異がみられることが示されたと考えられる。なお、西浦（2013）の指摘などから、女性よりも男性の方が異性友人と恋人を区別していないことから、異性友人関係と恋愛関係の差異は男性の方が小さいことが推測されたが、異性友人関係における「絶対性」得点と関係満足度、親密度との関連では、男性では有意ではなく、女性では有意であったものの、その値に有意な差はみられなかった。そのため、少なくとも本研究においては、異性友人関係と恋愛関係における質的な差異は男女では大きく異ならないと考えられる。

次に、恋愛関係と夫婦関係では、恋愛様相尺度の「絶対性」得点と「開放性」得点において有意な差がみられた。高坂・小塩（2015）は恋愛様相尺度とアイデンティティや親密性（Erikson のアイデンティティ理論における親密性）、関係満足度などの関連を検討し、「絶対性」は関係満足度など関係の質に関わる次元であり、「開放性」はアイデンティティや親密性など自我発達に関わる次元であると指摘している。Erikson（1959: 西平・中島訳 2011）は成人期前期の親密な関係性について“適切なアイデンティティの感覚が確立されて初めて、異性との本当の親密さが可能になる”と指摘している。つまり、夫婦関係とは、夫婦関係を構築できるほどアイデンティティの感覚が確立されており、それにより相手を丸ごと受け入れるほどの“本当の親密さ”を手に入れることができている両者による関係性であり、そこに至る前の両者の関係性が恋愛関係であると考えられる。

恋愛様相尺度 3 下位尺度と関係満足度、親密度との関連では、恋愛関係も夫婦関係も男女ともに同様の関連を示した。金政（2010）は中年期夫婦における関係不安・親密性回避が

ネガティブな感情を介して関係評価に及ぼす影響を検討し、その結果が青年期の恋愛関係と類似していたことを示している。これらは、母子関係や恋愛関係、夫婦関係がいずれもアタッチメント関係として機能しており、質的には同様であることを示唆している。本研究における恋愛様相尺度3下位尺度と関係満足度、親密度との関連において、恋愛関係と夫婦関係において差異がみられなかったことも、これらの知見と一致するものであるといえる。

これらから、異性友人関係と恋愛関係は恋愛様相モデルと関係満足度、親密度との関連において質的に異なる関係であり、恋愛関係と夫婦関係は恋愛様相モデルの次元において量的に異なる関係であることといえる。

本研究では、異性友人関係と恋愛関係、夫婦関係について恋愛様相モデルの観点から比較し、上記のような知見を得た。異性友人関係と恋愛関係の差異や、恋愛関係と夫婦関係の差異については、さまざまな観点から議論・検討されているところであるが、これらの議論について、本研究は新たな知見を提供できたと考えられる。一方、恋愛様相モデル及び恋愛様相尺度は青年期における恋愛関係を想定して作成されたものである。そのため、特に夫婦関係においては、「開放性」から対応する各項目へのパスが有意傾向に留まり、「飛躍性」の $\alpha$ 係数は低い値であった。これは、夫婦関係のあり方(様相)を捉えるためには恋愛様相モデルが適していないことを示唆する可能性があり、今後、夫婦関係のあり方を捉えるためのモデルについて、改めて検討する必要がある。

また、本研究で用いた親密度項目は著者が独自に作成したものであった。 $\alpha$ 係数は十分な値を示したが、信頼性・妥当性が十分に検討されているとは言い難い。そのため、親密度に関する結果の一般化には留意が必要である。

本研究では、異性友人関係と恋愛関係は質的に異なる関係であることが示されたが、人は異性と出会った時点で異性友人となるか恋愛関係となるかを区別しているわけではない。しかし、その異性と関わりをもつ中で、異性友人となるのか、恋愛関係となる(あるいは恋愛的な意味での好意をもつ)かが分かれていくと推測される。その質的な分岐が何によって生じているのかについては、さらなる検討が必要である。

#### 《引用文献》

- Berscheid, E., Snyder, M. & Omoto, A. M. (1989). The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of personality and social psychology*, 57, 792-807.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: International University Press. (Erikson, E. H. 西平直・中島由恵(訳)(2011). *アイデンティティとライフサイクル* 誠信書房)
- 金政 祐司 (2010). 中年期の夫婦関係において成人の愛着スタイルが関係内での感情経験ならびに関係への評価に及ぼす影響 *パーソナリティ研究*, 19, 134-145.
- 金政 祐司・大坊 郁夫 (2003). 愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係 *感情心理学研究*, 10, 11-24.
- 高坂 康雅 (2010). 大学生における同性友人, 異性友人, 恋人に対する期待の比較 *パーソナリティ研*

究, 18, 140-151.

- 高坂 康雅 (2011). 青年期における恋愛様相モデルの構築 和光大学現代人間学部紀要, 4, 79-89.
- 高坂 康雅 (2016). 恋愛心理学特論 恋愛する青年/しない青年の読み解き方 福村出版
- Kosaka, Y. (2016). Prediction of dating violence by aspect model of romantic relationship in adolescence. ICP2016 poster presentation PS25P-08-172.
- 高坂 康雅・小塩 真司 (2015). 恋愛様相尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 発達心理学研究, 26, 225-236.
- 茂木 暁・石田 浩 (2019). 結婚への道のり—出会いから交際そして結婚へ— 石田 浩(監) 佐藤 博樹・石田 浩(編) 格差の連鎖と若者 第2巻 出会いと結婚 (pp.44-75) 勁草書房
- 西平 直喜 (1981). 青年の世界3 友情・恋愛の探求 大日本図書
- 西浦 真喜子 (2013). 恋人と友人の境界 大坊 郁夫・谷口 泰富 (編) 現代社会と応用心理学2 クローズアップ「恋愛」(pp.72-81) 福村出版
- Rubin, Z. (1970). Measurement of romantic love. *Journal of personality and social psychology*, 16, 265-273.
- Shaver, P. R., & Hazan, C. (1988). A biased overview of the study of love. *Journal of social and personal relationships*, 5, 473-501.
- 返田 健 (1998). 青年期の友情と恋愛 寺田 晃・岡堂 哲雄 (監) 落合 良行 (編) 思春期・青年期メンタルヘルス・エッセンス こころの彷徨 (pp.79-100) 日本文化科学社
- Sternberg, R. J. (1997). Construct validation of a triangular love scale. *European journal of social psychology*, 27, 313-335.
- 谷口 淳一・大坊 郁夫 (2005). 異性との親密な関係における自己呈示動機の検討 実験社会心理学研究, 45, 13-24.
- 立脇 洋介 (2007). 異性交際中の感情と相手との関係性 心理学研究, 78, 244-251.
- 宇都宮 博 (2016). 恋愛から婚約, 結婚への道のり—夫婦関係の成立に向けて 宇都宮 博・神谷 哲司 (編) 夫と妻の生涯発達心理学 関係性の危機と成熟 (pp.36-52) 福村出版
- Werking, K. L. (1997). *We're just good friends: Women and men in nonromantic relationships*. New York: Guilford Press.

付記：本論文は、日本青年心理学会第28回大会にて発表したものに、分析等を加えて論文化したものである。

また、本論文について、開示すべき利益相反関連事項はない。